

博士論文（要約）

臨書する身体:
書道熟達者の臨書制作プロセスの事例的研究

野澤 光

令和3年度

東京大学

要約

本研究の目的は、一人の熟達した書家が、一つの臨書作品を作り上げていく過程を、複数の定量的・質的データから重層的に記述し、作品制作のプロセスを明らかにすることである。

この目的を達成するために本研究は、書家の身体行為と造形作品が、循環的に相互作用して作品が生成するプロセスを、オンゴーイングに記述するアプローチを取った。身体行為の変数、造形作品の変数が、相補的に結びついた系を成しているというシステム論の視点に基づいて、本研究は、書家の環境-身体システムの振る舞いを、画像データ、運動データ、インタビューデータから重層的に記述した。具体的な実験としては、難度の高い生態学的制約を課した状況下で、書道熟達者1名に臨書作品の制作を求め、環境-身体システムが時間発展する軌跡を、数時間にわたって記述した。

実験においては、書道熟達者1名に、北碑の古典作品『鄭義下碑』から抜き出した17文字を「形臨(外形に忠実な臨書)」するよう求めた。実験の結果、書家は約6時間をかけて、16試行の臨書作品を制作した。書家が作品を制作する過程は、画像データ(臨書作品の画像データ)、運動データ(モーションキャプチャによる位置座標時系列)の双方から記録した。これに加えて、実験の2年後に、書家のかいた全試行について半構造化インタビューを実施した。実験データの分析は、紙面上のレイアウトの分析と、身体行為の分析という二つの側面から行った。

「第5章: レイアウトの分析」では、臨書の画像分析と、半構造化インタビューの分析を行った。画像分析の結果は、書家が、文字造形の4つの変数(文字位置・面積・縦横比・字間)のあいだに共変関係を築くことによって、紙面内の文字の形態と位置を調整していたことを示していた。インタビューの分析結果も、画像分析の結果とおおまかに一致していた。計量テキスト分析の結果は、後半1/3試行において、文字形態の相対的に安定する領域と、調整の継続する領域とに、紙面上の調整レベルが分化していたことを示唆していた。総じてレイアウトの分析結果は、書家が、紙面のフレームと文字の組み合わせという生態学的制約に応じて、文字造形の調整レベルを入れ子化する、一貫した技能と方略を駆使していたことを示していた。

「第6章: 運動の分析」では、書字姿勢、視線探索という二つの観点から、身体運動の分析を行った。書家の書字姿勢の分析結果は、臨書行為がたんなる腕の運動を超えた、

全身協調の上に成り立っていたことを明らかにした。書家の体幹は、身体システムにおいて、一つの機能的な自由度として利用されており、局面に応じて積極的に筆先の書字に参加していた。視線探索の分析結果から明らかになったのは、書家が、紙面に対して文字をかくために一貫して分化した書字の手順を、周囲の環境に対する能動的な調整に埋め込んで遂行していたことだった。書家は、紙面の周囲を上下左右に見回すインターバル中と、臨書と原本を交互左右に観察する書字中とのあいだで視線探索の方向を分化させる、一貫した書字手順を遂行していた。これと同時に、書家の視線探索は、紙面位置に応じて柔軟に変化していた。とりわけインターバル中は、紙面位置に応じた予期的な視線探索が周囲に張りめぐらされていた。

「第7章: 総論」では、重層的に分析した実験データをあらためて総合し、書家の身体技能を議論した。

「7.2 行為面と造形面の結果の総合」においては、紙面上のレイアウトの分析結果と、身体行為の分析結果を照合し、環境-身体システムの振る舞いの全体像を描き出した。紙面上のレイアウトと、書家の視線探索は、紙面の行中央の余白を探索、調整するという共通の目的のために相補的に結びついた系として振る舞っていた。

「7.3 環境の中で柔軟に組織された動作の一貫性」においては、書家の発揮していた能力の特質を、熟達技能の柔軟性という視点から議論した。書家の際立った技能とは、一貫した書字手順で、そのつど変化する環境の制約の中に文字を埋め込むことのできる、柔軟な調整能力にあった。

「7.4 臨書制作プロセスのダイナミクス」においては、実験データの時系列的な変化をあらためて総合し、臨書制作プロセスに関する本研究の仮説を提出した。画像データ、運動データ、インタビューデータを総合した結果、前半1/3試行と後半1/3試行において、書家が質的に異なる紙面の余白の探索パターンを駆使しており、それぞれの局面で優れた臨書を制作していた可能性が示された。臨書制作プロセスにおいて、課題のゴールや目的はあらかじめ定まっておらず、16試行を通じたゴールは、環境資源の採掘を継続することによって、徐々に立ち現れていた。

「7.5 水に拘束された身体」では、先行する描画研究と、書家の視線探索を比較することを通じて、臨書にとって特定の制約が何であるかを議論した。他の描画行為と比較した結果、紙面の光学的な情報を安定させることの困難な局面が長時間継続することが、臨書行為の課題制約の特徴であり、この要求に応えるために、書家が高い頻度の観

察動作を数時間にわたって継続できる身体を発達させていた可能性が示唆された。また、書において用いられている墨が書家の行為に与えている時間制約を議論した結果、墨の物理的特性に適応するために、筆先の摩擦を通じた知覚情報に鋭敏な身体を熟達者が発達させている可能性が示された。

「7.6 書家の身体技能の階層性」では、書家の技能を、Bernstein の階層的な身体技能論にしたがって定式化した。レベル A の体幹運動、レベル B のリズムミクな視線探索、レベル C の筆先の書字動作という複数の運動タスクを、いかに書家が階層的に組み上げていたかを議論した。書家は、律動性をもった全身の「構え」を築き上げることによって、複数の運動タスクを相互に外乱とにならないよう入れ子化して、一つの身体技能として統合していた。続いて、臨書行為の最中において書家が発揮していた資源活用性を議論した。墨の滲みや掠れ、運動のスリップといった偶発的な要素を、書家がいかに進行中の行為の最中に自己の臨書にとりこんでいたのか考察した結果、書家が、筆先の摩擦を通じた自己受容感覚によって、能動的な行為の最中にしか知覚できない刹那の資源を利用していただ可能性が示された。

「7.7 能動的な行為の中に現れる他者」では、前節で示された臨書行為の資源活用性が、いかなる書家の知覚能力を基盤にして可能となっていたのか、あらためて詳細に議論された。Billeter による臨書行為の経験的記述、Bernstein の身体技能論、本研究の書家の技能を、相互に比較した結果、書家が能動的な行為を通じて、筆先の摩擦から他者の知覚を感じ取り、自己の運筆によってそれを再現しているという本研究の仮説が導出された。

「7.8 臨書行為の歴史性」では、世代を越えた臨書行為の歴史性が議論された。本研究の書家が取っていた書字姿勢と、明治期の書家の考案した書字姿勢を相互に比較した結果、一個体の統合された技能の中に、文字のかたちを介して系統的に継承された運動パターンと、その個体が発達させた固有な運動パターンが混在して、スキル化されている可能性が示唆された。この議論を土台として、文字をかく身体が発達して独自なかき振りを獲得し、新たな文字のかたちを次世代に継承する、臨書行為の歴史性が議論された。環境-身体システムの時間発展の結果、初期条件では予測できなかった文字が生みだされる現象も含めて、文字の継承という現象を捉えるために、Billeter のボディセンス概念が再検討された。この再検討から、書家の自己受容感覚が、文字痕跡から他者の知覚情報を引き出すことを可能にするとともに、環境の制約や偶発性をも巻き込んだ新たな

文字のかたちを他者に継承する、媒体として働いているという仮説が導き出された。書家のボディセンスは、書家自身の身体技能と、文字のかたちが相互に可塑的に発展していくための、要となる資源であり媒体であると考えられる。

「7.9.書の未来への提言」では、本研究の明らかにした書家の技能から導き出した、書という営み全体に対する提言を述べた。まず、本研究の明らかにした書家の身体技能の能動性を見たとき、書道教育においてしばしば用いられる臨書カテゴリー(形臨・意臨)が、あらためて批判的に再検討されなければならないことが提起された。また、本研究の明らかにした書家の身体は、環境における微細な要素を活用できる、鋭敏な知覚能力を鍛え上げていたことに特徴があり、この書家の身体のもつ感受性という側面から、現代の書を見直す必要があることが提案された。

「7.10.本研究の限界と今後の課題」では、事例研究の限界と今後の研究プロジェクトが示された。事例研究である本研究が明らかにしたのは、臨書行為の要求する生態学的制約のセットの記述であり、本研究の書家が取っていた文字制御方略や書字姿勢は、あり得る解決の一つにすぎない。また、本研究は、実験から2年後にインタビューを実施したため、参加者の発話内容は、単純な記憶の想起とは言い難い内省報告に変質していた。本研究の成果は、芸術家の発話から造形操作を間接的に分析する計量テキスト分析の手法を作り出したことにあった。

今後の研究課題として、第一に挙げられるのは、造形芸術のかたちから情報を抽出する身体技能を、具体的な実験系によって検証する、新たな造形研究のパラダイムを作り出すことである。第二に挙げられる課題は、書家の予期的な視線探索を、より限定された実験系によって検証することである。以上のように、本研究の分析手法と基礎的知見をベースとすることで、さらなる造形研究のプロジェクトを作り上げていくことが望まれる。